顕現後第1主日・主イエス洗礼の日　　2011/1/9

聖マタイ福音書第3章13節～17節
於：聖パウロ教会　　司祭　山口千寿

　1月6日は顕現日の祝日でした。顕現日は、主要な祝日の1つに上げられていますが、今年は木曜日にこの日を迎えましたので、参列者は僅かでしたが、早朝に聖餐をもって祝いました。東方教会（ギリシャ正教とかロシア正教の教会）では、伝統的にこの日をクリスマスとして盛大に祝います。暦の関係で、今世紀は7日がこの祝日に当たるようですが、6日の夕方から7日にかけて、丁度、わたしたちが12月24日から25日にかけて主イエスさまのご降誕を祝うと同じように、正教会では大きなお祝いの礼拝を捧げます。
　クリスマスは、4世紀になってローマで祝われるようになりましたが、顕現日は、それよりも以前から守られてきました。2世紀には、エジプトでイエスさまの洗礼を記念することが始まりました。それは、キリストは洗礼によって人間イエスと結びつけられてこの世に現れたと理解されたからです。つまり、イエスさまは洗礼を受けたときに神の子とされたのだと考えたのです。このような考えは、後に教会の正統な教えとは異なるとして退けられました。イエスさまはお生まれになった時から神の子であり、そしてまた真の人であったというのが、教会の正しい信仰であると認められたからです。
　東方教会では、イエスさまの洗礼とキリストがこの世に現れたことを記念する祝日として顕現日を守るようになりました。更にこの日には、3人の博士がイエスさまを拝みに訪れたこと、そしてイエスさまがカナの婚礼で水をぶどう酒に変えて最初のしるしを行って栄光を現されたことを合わせて祝うようになりました。
　顕現日が西方教会に伝わると、イエスさまの洗礼を記念する意図は失われていき、3人の博士の訪問が象徴するように、全世界にキリストの到来が明らかにされたことを祝うことが主たることとなりました。古い祈祷書では、顕現日を現異邦日、御子が異邦人に現された日と呼んでいました。覚えておられる方もおありだと思います。顕現日の特祷は、「独りの御子を東の博士たちに現された神よ」という呼びかけで始まりますが、現異邦日と呼んだ特徴がここにも現れています。
　近年の祈祷書改正の動きの中で、東方教会で守られてきたイエスさまの洗礼の記念が回復されるようになり、日本聖公会でも顕現日に続く最初の主日を、主イエス洗礼の日として守るようになりました。従って、顕現日には、3人の博士の訪問、イエスさまの洗礼、そしてカナの婚礼で栄光を現されたことの3つを祝います。最初に歌いました聖歌 112 番と奉献聖歌の 114 番の歌詞には、その内容が歌われています。
　さて、イエスさまはご自分の宣教活動を開始するに先立って、洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになりました。そのために、わざわざガリラヤからヨハネが活動していたユダヤの荒野の近くのヨルダン川まで出て来られました。たまたまヨハネの活動していた近くを通りかかって、ヨハネの呼びかけの言葉に応じて洗礼を受けたというのではありません。ヨハネから洗礼を受けなければならないという、はっきり

とした意志と目的をもってやって来たのです。イエスさまは、これから宣教活動を開始しようとするに際して、どうしても洗礼を受けることから始めなければならない。それが与えられた使命に生きる道だと確信して、ヨハネのもとにやって来られたのです。

ヨハネは、イエスさまをしきりに思いとどまらせようとします。ヨハネには、自分のもとに来られた方がどなたであるか、悟ることができたのでしょう。それは逆です。わたしこそ聖霊と火で洗礼を授けていただかねばなりませんと言って、メシアが登場したからには自分の時代は終わったと道を譲ろうとするのです。人々に神さまの審きを告げたヨハネも、自分もまた聖霊と火の洗礼によって罪を焼き尽くし、新たに造りかえていただかなければならないと、厳しく自らを問うのです。神さまの恵みがなければ立つことはできないと告白するのです。

イエスさまは、「今は止めないでほしい。正しいしいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」と言って、あくまでヨハネから洗礼を受けようとします。「正しいこと」と言われていますが、ヨハネから洗礼を受けることが正しいことだというのです。それが神さまの前に義と認められることだ、神さまとの正しい関係を打ち立て保持することだというのです。言い換えれば、イエスさまがヨハネから洗礼を受けることが、神さまの望みだということです。

イエスさまは罪のない方です（ヘブライ 7:27）。その方が、どうして悔い改めの洗礼を受けなければならないのでしょうか。イエスさまは、自分は罪を犯したことがないから、ヨハネから洗礼を受ける必要は全くないと言って、特別席にご自身を置くことだってできたはずです。しかし、そうはなさらなかった。悔い改めてヨハネから洗礼を受けようとした人々の中に立ってくださったのです。わたしたちと同じ1人となってくださったのです。

ヨハネは人々と対決する立場に立ちました。そして罪を告発することを使命としました。神さまの審きを告げ、人々を悔い改めへと導きました。それがヨハネに与えられた任務です。厳しい務めです。そのような務めは、使命感に支えられなければ、到底果たすことは出来ません。そのような務めは、孤独な働きにならざるを得ません。

もし、わたしたちがヨハネのように、ほかの人の過ちを指摘し、更に、生き方を改めるようにと促すとしたら、余程の覚悟がいることでしょう。影ではいろいろ言ったとしても、正面切って他人の生き方に口出しするようなことは、余程親しい間柄であっても、なかなかできないことです。信頼関係に基づいていなければ、いらぬお節介を焼くだけのことと迷惑がられてしまいます。2度と口を利いてもらえなくなるかも知れません。

このヨハネの姿とは根本的に異なって、イエスさまは人々の側に立ちました。悔い改めを必要とする人々の罪の中に、イエスさまは立たれるのです。律法に背き、神さまから離れ、悪の力にうち負かされている人々の中に立って、人々の苦しみや悲しみ、そして辛い思いを受け止め、共に担って下さるのです。そうすることが、神さまの正しさを貫く道だと言って、一緒に歩んで下さるのです。

人々の向こう側に立って説教するのではなくて、人々と共にあり、共に悩み、人々の思いを感じ取って下さるのです。

人々の立場からすれば、ヨハネの指摘は全く正義そのものです。その指摘の前には頭を垂れるほかありません。しかし、罪から逃れることの出来ない弱さを、自分自身では何とも解決することが出来ないのです。絶望的ですらあるのです。その人々と共に、イエスさまは洗礼を受けられたのです。悔い改めに生きることを、人々と共にして下さったのです。人々の悔い改めが真実のものとなるように、イエスさまご自身が洗礼を受けて下さったのです。

イエスさまが洗礼を受け水から上がられると、3つのことが起こりました。まず、天が開き、第2に聖霊が鳩の姿をして降ってきました。そして第3に、「これはわたしの愛する子、わたしの心の適う者」という声が天から聞こえてきました。

天が開くという象徴的な表現で何を言おうとしているのでしょうか。それまでは天は閉じていたのです。イザヤ書の中に「どうか、天を裂いて降ってください」という熱い祈りがあります(63:19)。神さまの働きをどこにも見ることができないと判断せざるを得ない状況が久しく続いたときに、神さまを求める思いを、その止むに止まれぬ気持ちを、「天を裂いて降ってください」と訴えたのです。

その天が今、開けた。隠されていた神さまの御心が示され始めたのです。言い換えれば、啓示が始まったということです。今、目の前に立っておられるイエスさまこそが、神さまの御心を実現する方、啓示そのものであることが明らかにされたのです。それは、聖霊が鳩の姿をとってイエスさまを包んだことによっても分かります。旧約以来、神さまに選ばれ、神さまから与えられた使命に生きようとする人々には、神さまの霊が注がれました。同じことがイエスさまの上に起こったと福音書は証しするのです。

そして、「これはわたしの愛する子、わたしの心の適う者」という声が天から聞こえました。これは、イエスさまは神さまの愛する子であると同時に、神さまの僕であるという天からの宣言です。

今日の旧約日課はイザヤ書の42章から取られていました。この箇所は、イザヤ書にある4つの「主の僕の歌」の最初のものです。「しかし見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を」と歌い始めますが、この僕こそが神さまの心に適う者なのです。

イエスさまが神さまの御子として立派なお姿を現しておられるだけであったら、罪の泥沼の中にどっぷり浸かっているわたしたち人間とは、遠くかけ離れているところに立っているだけのお方に過ぎないのです。そのイエスさまが、同時に神さまの僕として、ただひたすら神さまの救いのご計画に黙々と従って、十字架の死に至るまで歩んでくださった。わたしたちの身代わりになってご自身の命を捧げてくださった。絶望の叫びを上げながら、それでも尚、「我が神、我が神」と呼ばわって、全き信頼を父なる神さまに寄せられた。十字架のイエスさまには、絶望と信頼が同時にあるのです。何という矛盾でしょうか。でもこの矛盾を突き抜けたところに、神さまの救いの御業は成し遂げられたのです。

イエスさまはご自分の使命に向うに当たって、ヨハネから洗礼を受けられました。それはその宣教のご生涯がどのようなものであるかを暗示しています。そのような主の僕として生きる道が、父なる神さまによって承認された出来事が、今日の福音書の物語です。

パウロは、「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです」と言っています（Ⅰコリント 9:19）。パウロは生粋のユダヤ人であり、律法を守ることにおいては完璧な人でした。それが回心する前のパウロのアイデンティティです。そのパウロが、イエスさまと出会うことによって自分のこだわりに生きることを放棄したのです。イエスさまに倣ったのです。それがイエスさまに従う道です。そうすることで、神さまの恵みに生きる道を見出したのです。

わたしたちも洗礼・堅信を受け、神の子とされ、聖霊に励まされながらイエスさまの後に従って行くように促されています。それは、自分自身にこだわりを持ち続けることから解放されて、自らを捧げて生きるようにとの神さまからの招きです。その招きに応えることができるように祈り求めながら、日々の信仰生活を送って参りたいと思います。